岩見沢東高等学校　男子テニス部通信　　２０１５．２．４．

Ganto Tennis

第５３号

文責：佐々木雄介

置碁（おきご）

囲碁では、二人の棋力に差がある場合、ハンデとしてあらかじめ盤上に石を置いてから対局を始める。これを置碁（おきご）と言う。６級の人が１級の人と対局する場合には、指定された５カ所に石を置く（５目（もく）置く）のだ。ちなみに「自分より能力の高い人に敬意を払う」という意味の「一目（いちもく）置く」は、この置碁から生まれた言葉である。

囲碁棋士の依田紀基（よだのりもと）氏は岩見沢市出身の４８歳。名人４期、十段２期、碁聖６期、NHK杯優勝５回など、獲得したタイトルは３５。国内最高の棋士の一人である。まなみーるでは、毎週、彼の名前を冠した“依田こども囲碁教室”が開かれ、市内のお年寄りたちがボランティアで子供たちを指導している。年に一度、全道の子供たちを集めて囲碁大会も行われ、この日には依田氏も訪れて、講評で面白い話を聞かせてくれる。

‥‥‥囲碁では、５目（もく）も６目（もく）も置かせるような弱い相手と打つこともあるわけですが、そういう相手は、自分ほどは局面を読めないのです。自分がミスをして、同レベル以上の人が相手なら大石（たいせき）（たくさんの石）を取られてしまうようなときでも、弱い相手はそれを見逃してくれる。ミスは帳消しになるんです。では、ここで、相手がミスしてくれることを前提に石を打ったらどうでしょう。つまり、相手が読めないのをいいことに、打たれたら困る急所を放ったらかしにしておいて、別の場所に打ったら‥‥‥。恐らく、その対局は勝つに違いないけれど、でも、そういう人は強くなれないでしょうね。まあ、弱い相手にはめっぽう強いんだろうけど‥‥‥。相手が強かろうが、弱かろうが、いい石（よい場所に打つ石）はいい。悪い石は悪いんです。だったら、いつも自分にとって最高の石を打つんでなくちゃ強くなれないし、相手だって上達できない‥‥‥

校内での試合、力の劣る相手に対してダブルスで並行陣を作るとき、またシングルスでネットに詰めるとき、バックサイドへのワイドなアプローチの多さが目に余るのだ。そもそも相手には、まだバックハンドでパッシングやロブをコントロールするストローク力がない。だからミスもしてくれるし、おあつらえ向きのボールで“ごっつぁんボレー”も決めさせてくれるのだ。しかし、力の劣る相手のミスを前提にプレーして得点を奪い、ドヤ顔することにどれほどの価値があるだろう。ならば、相手が強かったらどうなのか。浅くワイドなアプローチでは、パッシングを通されやすくなる。クロスロブを返されやすくなる。だとすれば、深いボールをセンターにアプローチするコントロールの重要性は改めて言うまでもないのだ。少々強い相手だとネットに詰められなくなるのは、アプローチがショボいからに他ならない。だったらアプローチの質を高めるしかないじゃないか。もちろん、ワイドなアプローチが総て悪いというわけではない。でも、どうしてもっとセンターに拘（こだわ）ろうとしないのか。相手が強かろうが、弱かろうが、いい石はいい。悪い石は悪いのだ。だったら、いつも自分にとって最高の石を打つんでなくちゃ強くなれないし、相手だって上達できない‥‥‥。諸道変はるべからず（徒然草）である。